六
護良
親王
正成
義貞
圓心

1989
7

南北太平記圖會卷之六

初篇

目録

正成再起赤阪義兵
正成智降湯淺定佛
正成計破隅田高橋
公綱決死向天王寺
遊軍計正成屈公綱
公綱全功退天王寺
正成拜秘記定將卒心
圓心苔縄山擧義兵
高時大起七道兵

正成定計籠千劍破
東軍分三手向三城
人見本間拔懸赤阪
追父跡資忠死同條
東兵斷水道降赤阪城
時治引兵向金剛山
間諜計害平野將監
岩菊九越嶺陷芳埜
代親王義光死花櫓

南北太平記圖會巻之六

初篇

正成二赤阪起義軍　正成智降湯淺定佛

此時楠正成ハ先帝ハ彼態奉ヲ。天下唱義魁ト成テ一旦義兵ヲ挙ゝ時ハ。いまゝ時到らずして去年十月赤阪の城ハ大ト敗ち。詐て自滅の報ヲ来ゝ。密ハ遁まて金剛山の奥なる。親名寺ハ深く隠まヒ野長瀬六郎ゞ扶助ヲ受て。一族従臣家子郎ヲ所くハ忍ビ世時変の安危ヲ伺ひ居処ハ大塔宮護良親王の遺善寶塔ヲ根城ト〳〵て楯籠りうハ。甚多えありけまバ正成大ハ喜び時阪ハ立りぬ。て。一族従臣ヲ召集めて事ヲ議て。先吉野ハ赴て。一山ヲ味方ニ引ぬ。ヲ上策ハ。ハ。奉ヲ中上ゝまヒ。某南城の新拠ヲ。奉ヲ此処ハ行ゝて敵の実情ハ足立ゝ味方防戦ハ利あり。然まこも要塞ヲめぐ已作ハ。南城ハ。て拵ヲ板ヲ。ハ。ハ。ハ

難所なりと雖も。其上數千騎の不足の勢とのつくの山城の嶺くを固めたれば。北の
嶮を憑み。又敵の無案内を幸て自然と守を堅所なれば。若敵の長期有
て兵糧を付ひ其中所の人数に分て責るみるべし。中浦御方を攻たひべし。兵粮の
御拵あつて。水の自由なる小拳をえらみ。千騎の内味方を計をつるして戰ひを
攻しのぐべ。年來の本懷を達しうるん事。必定なる作とあるべきに本寺相拵
坊をこ出て申るい。柿敵の作の綱あるべ。兎も角も切と立い事
絡くの望処なり。今如何なる所に御陣をなるべ。
とく加様の儀と申上ぬるに及の意を知がたくして。嗚呼ぶきくいかなれども。當城
まるい彼の金峯山の北ふあるく一つの小城のい。昨日人を遣しまるせいをつり
羅ふ水を沢山に作よ。此所と城廓とく御勢六百まこに八百家人をこれ籠て
在く。殊の御勢ハ外山の間に潛み隱まて。敵の糧道を塞ぎ又遣をまんを
夜討朝無とれて惱しうひしに敵行ぞ敗北せざるんと申ぬ。実りて

思食を動るとこ見てるる。吉野執行善仲丸ハ御ものと頼じて申るい。
正成ハ中るく條来ハ為事ハ不審なる者なれ諸將伴緣の子て。面所と城廓
とく定めるまるる。正成一人の存会ふるく移城なく拵奉の面く
其ふ岩崎山の大衆一統の才智。正成を人ふ乃ぶ子とも。き強たるべ近臣大衆
とも未代の抵抗ふるべ。運ハ天ふあるて人の為業るあ決を通天ふ称ふ
則ハ勝ち天ふ達ふ刃ハ亡べ。往昔より先後多き事るて。唯常ふて御座所と
朝敵御退治仕くんふ。行の子細ふ及べきと。居大るふ為て遂ふ世各當座の
理ふ決して。正成ふ中條佐平ふ仕るる。正成も計ふ是ハ為て。日本國
一国くまるる。教国と徳ぶて正成ハ察智の如く。裏手ふ落城乃びくるあて
に備くまき。去程ふ正成ハ本國へ引ち帰ぬ。一族後臣と評定く遠ふ義兵と起く
先宮殿城をまこ赤坂と名付べ。て潜ふ網作と造りて城中の様子と付せ
るるふ其者ハ乃ち楠ハ湯浅孫六八道定佛と申者て作る。城中

正成再び
義兵を起し
謀て赤坂の
城を乗取
湯浅定佛と
防ぎ戦ふ圖

弟に兵粮を送りて。宮矢武具も調へず。兵数凡百人ばかりに過ぎざるを。
正成ひそかに実否を明らめんと。良臣恩地左近満一ふ仰せて。八郎太夫と
猪鼻の有名ふ懐を出せ。楯板と云ふ物を拵へ仕立て。楠内へ入れ。楠中の構の
分限ばかりの人積りせ。今の世易しとて。元弘二年四月二日 約帝の親仏寺と
て。同三日卯の刻を勢凡百余騎。西水の流れを靡かせ。不意ふ起て赤坂の城へ押
寄る。守将湯浅孫六入道大ふ慌て。城門を固めて。人も出さず。午の刻ふ成て。
彼と云度徒ぶとして城門を開き。一人も出さず。午の刻
あり。兵を一里退け。小ふる紀度野ふ陣を。時城中五粮の用意をしかりければ。
湯浅の所領紀伊国の所領ばかり。人夫凡百人ばかりつゝ粮と赤坂へ運送し。夜
中ふ城へ入れ。織り。正成風を見て。宮方の軍なりとて。和田基茂を宮方
の軍二百余人と。紀の兄弟の切所へ追き。遠くまと奪ひ。人夫五百人と
皆紀伊国へ追返して。去人も赤坂の方へ通さず。奴奪ひ取る兵粮の俵を

入替て馬に負せ。百人の士卒と湯浅の人夫ふ出立せ。四月八日の暮方ふ楠
中へ運び入る。彼と見せ。正成まと己が勢とて兵粮を奪ひ取りし氣色
ふて。追つ返しの日士軍を。宮方ふ楠の工ふ湯浅入道代伴を人を寄ふ楠ふ
我兵粮を奪ひ取りしを仏得て。赤坂を振捨て。楠の勢と八方へ逃散し云
粮の人夫と称して。楠の中へ引入れ。楠ふ似人夫思ひの俵を楠中へ入れ。
俵の中ふ鉄具を入れ。楠と同ふ。同ふ。同と呼ばれ。楠ふ
よりも楠の勢と合し。赤坂を手強く攻入れ。人夫ば湯浅入道門外の敵ふ
戦ひ。楠ふ勢と合して七百余騎ふて乃びる。又八尾別当顕幸ハ正成ふ代
用ひ。勢と合して。百余騎の勢と引き。赤坂の城へ籠り。正成と
幸ひ。正成も和睦を。自百余騎の勢と引き。赤坂の城へ籠り。正成と
幸ひ。勢と合して。敵を拵へ泉の国へ寄ひ。追ふ。国人追ふ。

くり程なく其勢三千余騎にぞなりける。同く正成を初め赤阪ふなくに民と梅宮
〜。寄ふ細仙と京勢へ遣し。六波羅の探題ぞ驚いろ。去程ふ
和泉河内の早馬を遣そうく捕こふ赤坂の城と責落し。湯浅入道と降し。
八尾顕幸を伐し。を勢し強大うて纏て京都へ責寄こんと企て作と云ふを
ば西六波羅と始め洛中の騒動斜ならぬこと。不思
議なりふ。又大勢うて攻上ると所詮〜多くは上。貴賤上下関章終に民士東西ふ
迷せ南北ふ騒り。畿内近国の勢六波羅へ馳集り。楠今日や責上てん翌日や
寄来らんと侍ども。更ふ寄もあぶりけまび。扨い南〜ふも。仰ず楠ふ勢うると
労ぬるぞ。早く山方より押寄せ〜ずば〜と。高橋判官隅田左郎左衛門尉を
軍奉行と。四十八箇所の角ふ在京人畿内近国の勢と合て。五千人騎。五月
廿日京勢を立て楠を征せしむ

正成計破隅田高橋　公綱洩死向天王寺

楠が忍術者。赤阪へ馳入ると云ふ。正成を。謀ら〜。半らんば
いまだ京都の討手もなくさる。此荒武千人騎。を引率く。五月十七日住吉天王寺の
辺へ出張し。淀道橋より南ふ陣を張。隅田高橋が此中と聞き。寄ふ橋を焼
廿日の夜。尼崎神崎柱松の邊ふ陣を張し。遠角を焼て。夜を侍明す。正東を
聞く。二千余騎と。二手ふ分ち。京徒の勢と住吉天王寺ふ伏。並僧ふ三百騎計を
淀道橋の南ふ殺させ。大角と二三箇所ふ焼せく。敵の陣ふ。あ勇ん。を怒と小
勢と見せく。敵よ橋を渡させ。伏勢と。此敵を水の流へ追。雄雄と一時く
渡せんと。集り〜。隅田高橋が勢。廿一日の暁天
所〜の陣と。不合〜。其勢。五千余騎。淀道橋へ。楠の
勢と。云ふ。僅ふ二三百騎。ふ。楠。乃
武者。なるべ。隅田高橋。ふ。慢。。。
ぬと思ひ〜如く。布歌。。。
。。。

勢て六波羅殿の御感に預るべしと仰ふる揚判官陽田左部左衛門
交じせ給ふ揚ろうと共一文なるべし流しくる。揚く後く五千余騎ときえんかく
馬をすめ武い弓つく揚のことを歩ませ又は泣と立て川瀬を渡し向の岸に寄
寄まとる。揚勢ことごとく遠矢かく射捨て一戰うと思へども彼方の勢天王
寺の方へ引退く。六波羅勢は是と続と思ひ揚ふ寄くく人馬の息をと継せ給
天王寺の北の人家まで揚よりんでを追ふる。正成は思ふ程敵の人馬を殺
時分はよりやく知せまる思しもよらぬ三度の伏勢一同に起て一度に天王寺の
東より。敵を引ふ請て揚よせ。一度に西門石鳥居より魚鱗に備へ揚出
一手は伯耆の雲陸より。別と乱して蒐合せ陣と揚ふ立く刑人等元より
六波羅勢は揚の勢と人合せまに対揚すると雖なを大勢なりとも陣を立遠
結なるに揚ふ。却て揚の少勢に取囲まれぬべうぞえこうる。陽田る揚いんを
焦ち敵陣ふ大勢と隙と組まるる。此迫に馬の足を乱まに敵の

勢の分際と人揚て無合せく揚員を後せ引けまとる。五千余騎の勢
敵ふ後と切まれ先中と。皆流れ揚ふ引退く揚の勢ちまふ乱と。三
方より敵と引つく。遠間もなく追無る。揚迫く成ぬまに陽田る揚馬をしうへ
敵ふ左陣くの大勢まそに合うるぞや。是を一返しうさんへ揚て大勢を
味方ふ利す。めせや者ども。三度せやと駆ふ。逃ぬつく引きどと
大勢の門ふる揚る。唯我て揚の陣へ近寄う人馬ふ推流さんく。
水ふ流ふ若枝を志ず。或は闘ふ雑まんと流しくけく流くものもあまた。
又馬ふ馬と乗落して。者もあり。只馬ふ引ぐ捨て逃迫んとする
者ぐるまを返合て戦うんとする者は一騎もなく。五千人余騎の勢ふ
さまを這く都へ上りくは直ぐなるを見くるる音ふ聞ふ
六条河の原ふる孔を立く一度の敗を
源氏の小づくう日はまぶ揚ふ陽田流くん

隅田高橋
渡邊橋敷
軍の圖

渡邊懷古

憶昔攝南渡邊戰長
橋幾丈若虹懸
高隅孤疑走千騎榊
公席搖翼一川
岸上蒼松歷年古砂
間碧水映天鮮
山河不改今猶在永
使後人悲往賢

蒿蘇菴村直賢

京童の僻なまいひ落書ふ部と分て扨ひ。あるひは繪ゝ作て笑ひ
ゝ行る間田舎の揚ハ大ふ恐ゝし且ハ虚病と擬ゝ。六波羅ハ出仕もせざりゝ
あ上ハ波羅ゝ味方の後軍と安かの軍ゝ無ゝ。重ゝ仕ゝ
ゝ。其大將と擬ゝ。維盛ゝ。
ふ勢なりゝ。後鳥羽ゝ都宮治部大輔公綱と上ゝ。西六波羅ゝ
ゝ則ゝ都宮公綱と知きて評定せゝ。紅の合戦の方運ハ始ゝ。雄
ゝ。南方の軍ハ負ゝ。軍ハ編ゝ將の作法
ゝ。又大軍の猛勢なるゝ。也天下の物騒ハ寒ゝ。人ゝ。彼軍の兵ゝ
猶集ゝ。行ゝ。ゝ。ゝ。

遊軍計正成惱公綱

公綱全功退天王寺

去程に宇都宮治部大輔公綱。あまた一生の軍とおもんじ給へ。今夜桂松に陣とりたるに。楠の細作速に天王寺へ注進しけるぞ。和田孫二郎正遠・楠の小林つくやの先日の合戦に屈強とて。家ぢうの宇都宮云綱と云作り。今夜已に桂松に著て作りの手勢僅に六七百騎に過ぎと聞へ。先に陽田宮内の五千余騎にて切ひしぐ。味方小勢と侮て退散くひしぐ。味方小勢なり。宇都宮程の武勇の達者なりとも。行程の半に作べき。今夜若し敵に逢寄して。捨ひしんと勇み立て。正成らをと判して申るに。無に小寡に衆に敵せずといへば。元軍の勝敗必しも大勢小勢に依べ。只大将士卒の志と云。せざるとにあり。ちぢ大敵と云に敵に小勢と云。其に畏て申すとそうの。楠陽田宮内の大勢うら敗北して迷惑する時。宇都宮に敵せずに小勢と云く我に敵せんと欲する者い

彼念慮十分にして。生を忘れ死を顧みざる者なり。今彼と議に。時勇に入く帰つ。敵きに合わるべ。まず良打て戦て。彼に勝て半のうべ。正成に利とり。其流れを避く。急に山陣とり退き。明日の夜に後に続き。彼を攻て。彼が内と攻めて。味方の山に浦に冊と構て。一しに敵を攻べ。楠宮内の宇都宮武者の勝ひ行ん。機を見て退んと申べ。

楠小宮内の云。計ひいらも有べ。今味方と援に軍とん。宇都宮の城東一の剛武者。紀清両党の強の戦功に陳に命を捨ん。今勢七百余騎にて戦と決せ。常の古維に退くんに。味方必ず打べ。天下の大事今敗の戦ひよ限べ。和氏の軍に多に。味方と思ひ。後日の大事に難に。紀清の武者の云ふ。無に時に寄に。夜已に曙天と。敵寄て迫付ぬ。正成所と立べ。吉凶さ世給へ。正成天王寺と立ぬ。和田八尾湯浅

の軍も悪く陣くと引拂てぞ退れける。宇都宮は僅七百余騎とぞ聞し。
古宇都の在家ふ火と無け。鯨波を揚て兵。天地もうごく。寄手ども
偶ぞすらん。此逸て馬の足を知く道狭く。無音敵ふ中と破らるる。又い後と
裏まるとり知く。紀清両党ふ加ふ人ぞ天王寺の東西の口より。無入く二
三度まで寄ける。故一人と見ぞすて。焼捨る無の煙さんくふ。夜い
ものくと明ぬる。宇都宮い戦ざる所と一揆しろんぬして。本堂のあくく
馬ぬりの上宮ぬる。伏拝くまるる。是偏に我武力の所ぬふ机ぞ。兵衛明
御所の擁護ぬ奉ぬる。行ぬと泣け敵ぬ。頃く重ぬ人ふ馬ぬ乗て天王
寺の敵ぞ即時ぬ追落ぬ作しめと。若ぬうけぞ。西方は羅ぬ落ぬ。郭内
外様の者ぞ。宇都宮ぬ今ぬの挙動抜群ぬして。奏めんとぞ。
敵ぬも公個ぬく敵と追ぬ。一面目ぬ。偽く敵の跡と結じも
無勢ぬ。又城の軍ぬも高ぞ。引返ぬ軍も阪石ぬ。道退

寄ふ谷ぬく。如何ぬせんと思ぬ。和田楠八尾湯浅の者
共。和泉河内の地伏ぬ。又千人と徳集め。拠る。兄弟二百騎ぬ。刮天と
寺の回遶ふ。無を焼せ。今も推寄る。色とんせぬ。宇都宮ぬ兵。
すんや敵ぬ。打ぬ。逢動く。ぬ方と屹と。やまで。杜鵑や外山里
生の嶽ふんの紅葉ぬ。夕ぬ。夜の星ぬ。数く。藤原竹志城津伝吉雄ぬ
陣ふ焼無ぬ。松くふ燃す演史の波と焼ぬ。
潮へ。今や来る。待ける。深く儘ふ無史ぬ。又次の夜
も紀伊大和河内和泉の國。ぬ。ぬ。ぬ。浦く焼ぬ。
千勢。数ぬ誘ぬ。ぬ。推寄ぬ。ぬ。敵ぬ。紀の如くなる半ぬ。夜ぬ。
沒月く。ぬ。相迫ぬ。ぬ。無内ぬく。東西南北ぬ。維上下ぬ。充満ぬ
闇夜ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。宇都宮ぬ。夜ぬ。敵ぬ。軍ぬ。揚ぬ。一
時ぬ。ぬ。ぬ。馬の鞍ぬ。見ぬ。澄の上帝ぬ。紀ぬ。待無ぬ。柿

宇都宮
公綱一騎
蒐小天
王寺へ
雷発
の
畠

敵く寄せくるまじ。如何に拘ふ通るかいへども。当屋を焼く。敵の五百騎ひ〳〵
雪氣形を成りくるくるそ喜まる退うじやと思ふ心の着てぐる所ふ紅まる
堂の前を公綱くるくるそつる。楠遊軍の計と知く御方と恐し。
〳〵大軍とおそれ驚ひ騒んと然を。我ふ人う気の所〳〵多ふ小勢と知く。彼が大
軍ふ当りの半始終つぐと見てひろ。先日南部の敵と半あく退屈〳〵作つ
ると一面目うく〳〵まくわと活作〳〵と伸るまじ。宇敵ふ武ふ門。七月
廿七日の夜半ごろふ。天う寄をとう掃ひて都へよりくるまじ。軍をとく大まじ。
〳〵社紙集ふ遣こびとそ。翌日軍天すまと天う寄ふ入智て威と足〳〵くる手
とつ〳〵ども。寄ふ徒を屋〳〵。敵ふ〳〵の然ひと威ざりくまじ。近国ちゆふ乃ごず。遠
壊遠境の人数まで。ちを聞伝へて我も〳〵と馳加ろ〳〵後ふ勢ひ盛ふ
、そ。今い弟数ろた者く紛ると下さん半叶ぐ〳〵ぞろ〳〵ろ。まじ今武楠と
宇敵武方虎二龍の剣ひとなさい。何ま双方共大事の損亡あごきこ。利ふん

楠引く一人の士卒も失ず。後ふい宇都宮退きて一統の兵とも損せざ
るい智謀深き良将雪氣程き武将なりと感せぬ人なりく〳〵

按ずふ公綱天こ寄と退くは。寄を待て戦せざるい。西ふ〳〵
公綱と知く〳〵など。そ〳〵人の中けんべ。八尾別当顕幸ふ見て。軍を
早めく〳〵宋朱ふ尔小〳〵て〳〵人ふ〳〵ぐ〳〵ぐ〳〵ぐ〳〵ぐ〳〵と伐ん
紛ふ知る。もあ〳〵ふ紛ま。敵の機と後ろを出て。宇敵武方を紛と
出ろ〳〵う余を茅ふ。尾仕ふ〳〵ふ。指角を死文せんと思ひ。和
泉実の合戦とひ。楠ふ〳〵。楠吾ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。
十〳〵ふ〳〵て〳〵ふ。合戦せず〳〵て。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。
茅吾ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。
ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。
逃ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。
ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。
ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。楠ふ〳〵ふ。

法
大寺の
正成遠眺
と称せ公綱
の勇気を
挫ぐ畫

仇を殺して刎ちすかふ[illegible]
の遺恨を[illegible]年を時と教たまふ。[illegible]
ふ遺恨を繼ぎ[illegible]
と[illegible]
四海[illegible]
あさましかりし[illegible]
和睦せしむ[illegible]
[illegible]
[illegible]
と[illegible]
が事なり。嗚呼楠公の智仁義勇忠の又備と備へ良將天下の大事を
[illegible]するが為。私の遺恨を捨。又捨て[illegible]
ふ表裏の二徳を備へ者と用ひ給ふべくんや

正成拜秘記定三軍心一　　圓心苔繩山拳義兵

斯て正成を尚天王寺ふ陣を居へて。近國の動靜を伺ひ中を[illegible]
維ふ將の兵を用ひ給ふ。一の[illegible]と[illegible]ふ[illegible]
先帝の元弘二年 新帝正慶元年 八月三日。まつ位を[illegible]
[illegible]の[illegible]寺の堂塔を[illegible]
[illegible]
數を捧げて。楠がおふ[illegible]
[illegible]
[illegible]

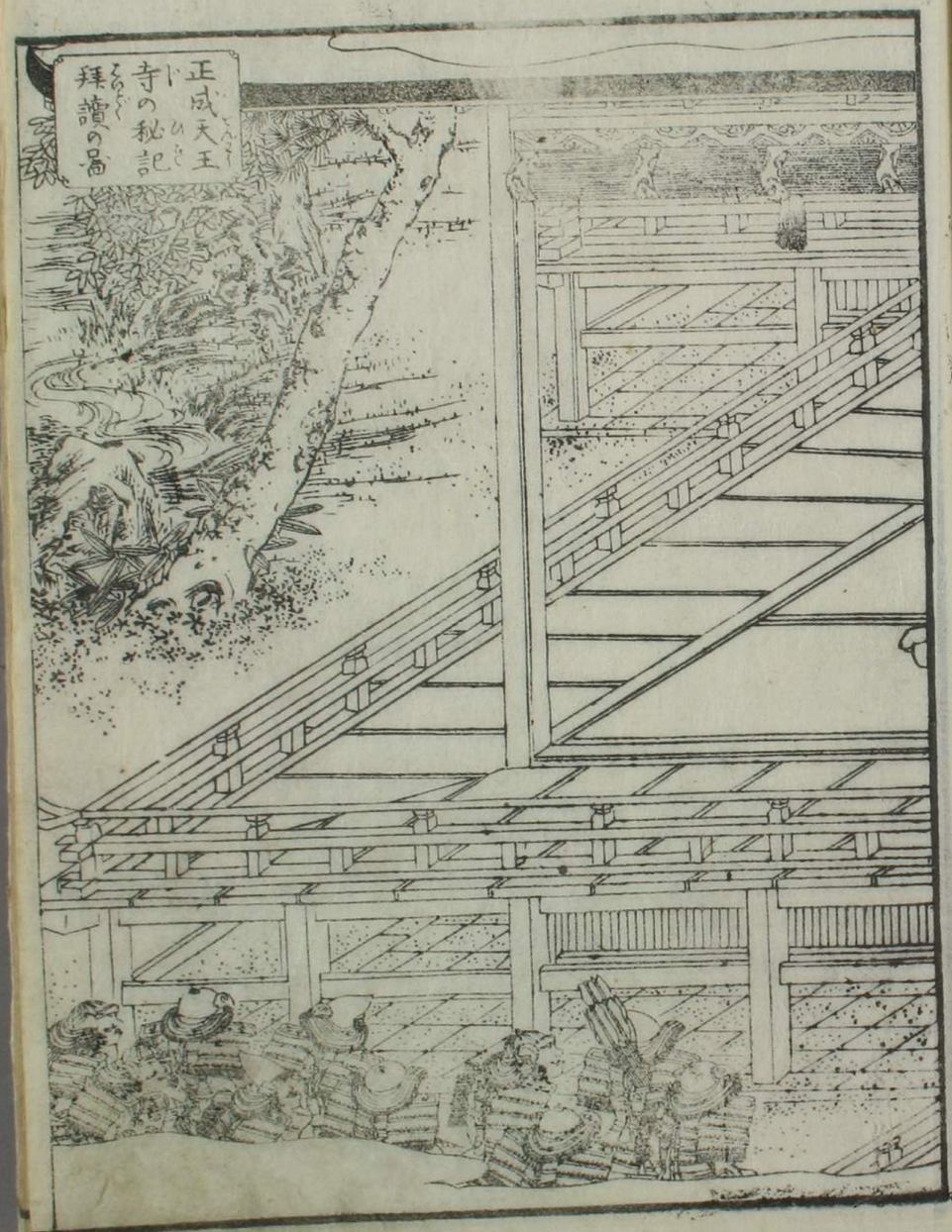
なめ。又詞ゐ人想して信を師るの方便とも成ぬべし。既所今の時ふ菌を作るん
寒竹一尺住りの竹を中と伸ばせい寺僧を召て問ふ。遠近宮殿と結て振
くらの寄と建立て佛法を弘めるまひ作のち神代ゆ伝ふ持統天皇の御
字ふ至るまでと結れる書十巻あり。前代舊事本紀と号て部宮称と
号て相伝して有徴家を立て。ふ亦一巻の秘書を別ふ一代ごとに持統
天皇ゆ来世代々の王業天下の治乱を紀して作今紀人の抜を待ず
作へども別紙を設て奏ふ人事を人ゆ。そ即ち秘府の根編を取て金匱の書
一巻を取出せり。ふ恭納ゆ。ゆ伏て披見ゆ。ふ巻中不思議の
紀文一段ありて文を曰

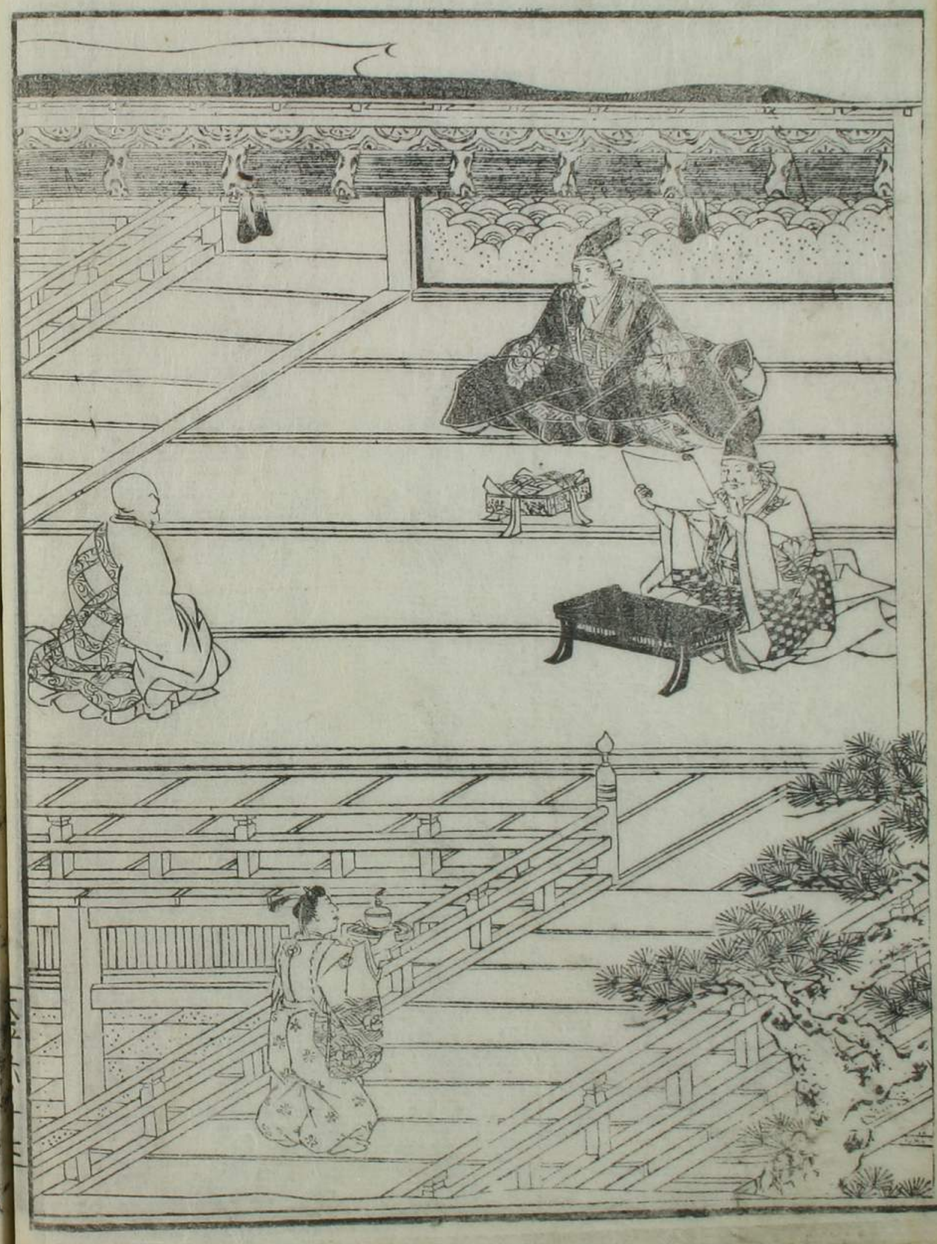
當人王九十五代天下一亂而主不安此時東魚来
天日四海日沒西天三百七十餘箇日西鳥来食東魚
其後海内帰一

ふ恭奇異のおもひを成て結くこの讖文を考へる。先帝之ふ人王の始めゆ
九十五代ふ當りて天下乱れて主不安とあるふ是ふ時ゆ
東魚来て呑四海とふ遠近相接入るなり。ふ関東ふ在て役行ふ鯨ゆ鯨い
列奥ゆて来て東奥なり。ふ沒西天とふ先帝ふ月日ふ沒
の御皇孫ゆて遠く西方隈故州ふ迷ふ。今隈没成ゆて仰ゆ。こ
百七十余箇日とふ此者隈故國ゆ都へ遠き来ゆて迷きゆて
て西島来食東魚とふ明年ふ是癸酉なり。先帝西方の西ゆ移ゆ。
遠ふ隈金の東魚を時と風ゆ一の時ゆ来ゆ鯨ゆ。西後文ふ未を讖
文を以ゆ前文と明ふ考ゆ。ふ実ふ天下の反復ゆて。密ゆ惕
の和田ふ遠ふ拝覧ゆ。ふ是を考ふ八人を拝せ。ふ信
仏肝ゆ銘ゆ。ふ是を考て大権之聖者来代と称て古墨ゆ。ふ文貴王
統ゆ乱変ゆ。ふ是ふ奇異後の讖文なるとふ古代来の人皆戦慄ありて事

ふいるをと爾〻く。此文を高官に拙そんを一段おなして書まゐ着いなりうろ。
山茶幻ら是今仰の志力一振老後ら人彼秘紀を絆の白ゑ〻〻紛めるる。その
後敏方ふも山平と伊〻く。法人の岡亡書きふあひとそうゝんと官軍うよを
楠ゆ公を通子う着ゑうゝ京を法揚子の関ふ赤松以帝入通国ゑとつのの
あり村上天皇ゑ第七之御子奥平紀を六代の苗裔後三位重房ゑ末孫なり
国ゑを心綱如ゐて人の下風ふ立華と好ずうを矢を和て抜群の着うゝ
忠を神んて名と弱し。山きふ白ん〻絡ると繼ぎ〻ゑ〻ると奥さんとあり
志のありゝゝ知ゝ京ゑの三男律師則祐この紀三年大塔宮ゝ高後ひ奉ゑ。
觀山ゝう熊野十津川の猟雑と絡て。此節吉野の城ゝ有ゝゝ。大塔宮幻祐
とゐを幻奉ゝて又田ゑとさゝ。御方と為ごきゝ命を幻ら今者と絡つ
て楠帥幻祐ふ関東の奏法房と名乗て楊弘遣きゝゝ京ん大ゐ怒き
名を今者と猟覚すふ。不日楊義兵平義勢速て今後幻祐数幻有を幻者

恩賞宜依清のゝ〻義を。拙要細の平十七年楠の忠義と法〻ゝ。
絡く幻ゝ家の白目吉の白ゝゝゝなまび。京ん紛ゝゝび怪ひ速ふ先蔵宗祐
閑応苔縄山ふ城を接ゝく。博方の華と拙きゝふ。関平の兵遣ゝふ孤ゝ幻
ゐくを幻一千人来続。宗盛漸く迫国ふ寄ひきび。頓ふ抜級山里の二ケふを寄を
居。山陽山陰の両道と名塞ぐ。乞ゝう中国の名止まゝて。西の法勢寄方
と山陰雄ゝ孤ゝる事を拙ず。唯奏ふの世ゝふ似きけ弱き。楠陳楊と云者
を撃ふ高て。奏弱ゝて大法ふ紀ゝゝふ吳なゝび
楊ゝ山茶天王寺赤松紀琢の手い時平の心と一段ゝなゝん為く。深く
絡ゝ寄ふ寺絡ふ後ゝ。法ふ一者と宗着ゝ。絡便ふ寄寄ふ紛ゝ。その後
法寄ゝと引ゝ天王寺ふゝう。ち絡ふゝゝゝ天ゝ赤ゝ赤紀の名と絡て彼
一者と名出せ。名鳥羽の文と絡ゝ。平のんと動ゝとのゝう。名ゝ味ゝび後
と上げ平と宮合ゝゝゝ。山茶ふ身ゝゝゝ。宗紛ち者鳴の数と上ゝ平ふ
達ゝゝふゝゝと絡ゝゝ。ゝの部ゝ動徒ゝ。後達武の礼岩ゝて吉也祈


正成天王寺の秘記拜讀の畫



帝の御像。山城守平[illegible]を上寫ふ達しんを古水汪平太郎白く。海内帰伏のちくも
と[illegible]ひ[illegible]こと行ふ而

海内帰伏三年如猴者掠天下九余年大山変帰一元

[illegible]のごく[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ

沖の方へ漕ぎ離れて。漁舟に分乗する兵船頭林右馬丞。外様の人々。千葉大介。都宮参河守。小山判官。武田伊豆三郎。長崎太郎左衛門尉。同九郎左衛門尉。二階堂出羽入道。同下野判官。同常陸介。小笠原次郎。土肥伯耆入道。葉右判官。三浦若狭守。千田左衛門。城左衛門。大井太郎入道。佐々木隠岐前司。結城七郎左衛門尉。長沼左衛門尉。長沼隠岐の守。宿谷左衛門尉。安房前司。同右馬入道。義左衛門尉。出羽前司。同右馬入道。義左衛門尉。武蔵前司。長井左衛門尉。安保左衛門入道。菊池次郎。山内首藤左衛門尉。宇都宮左衛門尉。同常陸前司。同右馬入道。義左衛門尉。出羽前司。結城七郎。千葉常陸前司。同右馬入道。義左衛門尉。安房前司。安保左衛門尉。長井左衛門尉。宿谷左衛門尉。武蔵前司。宇都宮左衛門尉。千葉大介。都宮参河守。小山判官。武田伊豆三郎。長崎太郎左衛門尉。同九郎左衛門尉。二階堂出羽入道。同下野判官。同常陸介。小笠原次郎。土肥伯耆入道。葉右判官。三浦若狭守。千田左衛門。城左衛門。大井太郎入道。佐々木隠岐前司。結城七郎左衛門尉。長沼左衛門尉。長沼隠岐の守。宿谷左衛門尉。安房前司。同右馬入道。義左衛門尉。武蔵前司。長井左衛門尉。安保左衛門入道。菊池次郎。山内首藤左衛門尉。宇都宮左衛門尉。千葉常陸前司。同右馬入道。義左衛門尉。出羽前司。結城七郎。

将軍の左右に侍。宮内大輔。長井左衛門尉。安保左衛門入道。菊池次郎。山内首藤左衛門尉。宇都宮左衛門尉。千葉常陸前司。同右馬入道。義左衛門尉。出羽前司。結城七郎。

宗俊の左右百三十騎。人馬合せて勢三十万七千五百余騎。九月廿日。陽会を立て

十月八日。先陣既に京都に著。とぶらひ後陣いまだ遠ざかる。

文治元年十二月。平家滅亡。国衡を生捕りて大江三位入道。

尾崎の宿に着陣す。義経大内介。頼朝に仕へ。安房。義経。熊谷。周防。

長門の勢を引具し。兵船百余艘。

伊奥右近左衛門尉。陸奥右馬助。外様の人々。千葉大介。都宮参河守。小山判官。武田伊豆三郎。長崎太郎左衛門尉。同九郎左衛門尉。二階堂出羽入道。同下野判官。同常陸介。小笠原次郎。土肥伯耆入道。葉右判官。三浦若狭守。千田左衛門。城左衛門。大井太郎入道。佐々木隠岐前司。結城七郎左衛門尉。長沼左衛門尉。長沼隠岐の守。宿谷左衛門尉。安房前司。同右馬入道。義左衛門尉。武蔵前司。長井左衛門尉。安保左衛門入道。菊池次郎。山内首藤左衛門尉。宇都宮左衛門尉。千葉常陸前司。同右馬入道。義左衛門尉。出羽前司。結城七郎。

或は甲斐信濃源氏七手金瘡。中山道を経て東山に向へば又江馬[illegible]守
清水の右京亮北陸道七ケ國の勢二万余騎にて。康板本を経て上京若州
より諸國士卒の軍勢我もくと発足する間。京白河の家々に居住す。磯
禅小桑栖日野勧修寺。宇治伏見より嵯峨仁和寺。梅津桂川の辺西山東山
に及ぶ。賀茂北野草堂河崎六角堂の門内下宿屋の中にも。軍勢の者
なきの所もなく日本小國と雖も。是ほどの人の多きことは始て聞くなり
西成は高槻に卿ゝ[illegible]平野将監小赤阪の陣を敷け。則ち義
[illegible]ひて。本國に帰り。先八尾顕幸の嫡[illegible]
城の[illegible]配とぞ。西成将監ふかく[illegible]
先水の手と第一と手ぶ。兵粮多く負人の物は密に持ぶ事易く。水は[illegible]
ふ事は難し。今赤坂の城は[illegible]
城中小井を深く掘やうべ城[illegible]

ざ[illegible]
と白状ふ苦る。中[illegible]大事小乃ぶ[illegible]
孫。敵は[illegible]國の者ふ[illegible]
縱[illegible]方の者捕[illegible]
作らしや。是の[illegible]
時事の[illegible]
と[illegible]者[illegible]
の敵[illegible]
べきと再三[illegible]
を謀[illegible]
西成は[illegible]
六十人余人[illegible]

北條高時
東海東山
山陽山陰
北陸南海
西海の七道
を仰せ〳〵
海陸の大兵
を起す事

其二

船軍之圖

正氏和田民部志摩守の勇士ふ主勢一千余騎とゝ添。金剛山と千剣破
との通路を断切く諸軍の兵糧と籠城なくしめ。二つゝ敵の方便を穿出
して味方へ援進く。寄手の虚を伺ひ夜討奇襲と為へしとゝ知。月宏
令く待うるまゝ。源氏の討手今や遅しと相待ける

東軍分三手向三城　人見本間越懸赤阪

去程ふ南方の官軍追討の諸勢沢山くふ京勢へ着陣しけれが。尚後を死
の葉と相待ける。今年も暮ふ暮て明ぬる二月廿六日。諸国
の軍勢八十万騎。芳壁赤阪金剛山の三方へ三手に分て寄ける。先壁野へハ
二階堂出羽入道道蘊と大将として。他の勢と共へ。二万七千騎にて
上道中道下道より三手に別て推寄る。赤坂へハ阿曽弾正少弼時治。金沢右
馬助貞冬と大将として。三万八千騎。金剛山へハ
大仏陸奥守貞直陸奥左馬助貞宣と大将として。三万騎。京良路より

向ふ。大手の大将ハ。長崎四郎左衛門尉高資。先陣ハ二十万騎にて攻ける。
別して待大将と。楠ハ己が勢ひの少と人ゝ見なんとや思ひ
けん。一日引さゝつて。三里ハ。生行坂の内の貝と名ける。生行坂の内
ふ陣を。ふ道しに馬ふ乗続けく。一様の陣前ハ兵八百人騎。二町計
先ふ立。残ふ馬をば。十せうふ。三騎ハ。楠が大口と
[illegible]ふ。白星の文殊甲ふ八龍と黄金にて。ふく前ハ猪頭ゝ着
ゝ。白銀の鍬形の脇前ハ。金作の左右二振と。一対黒ハ。天王寺ふ有ける
坂東一の名ふ。汝千騎の内。小松と金剛と磨ける鎧と。
拵ハ。二十二所ふ白鹿の根笠の大中黒。
扶と。寄せうふ。行小手ふ後前して。諸兵を。
後ゝ。ひつく。閑く。踏次をば。寄せうふ。
猪甲の下と。輝く。陣の神と。重て。皆の。

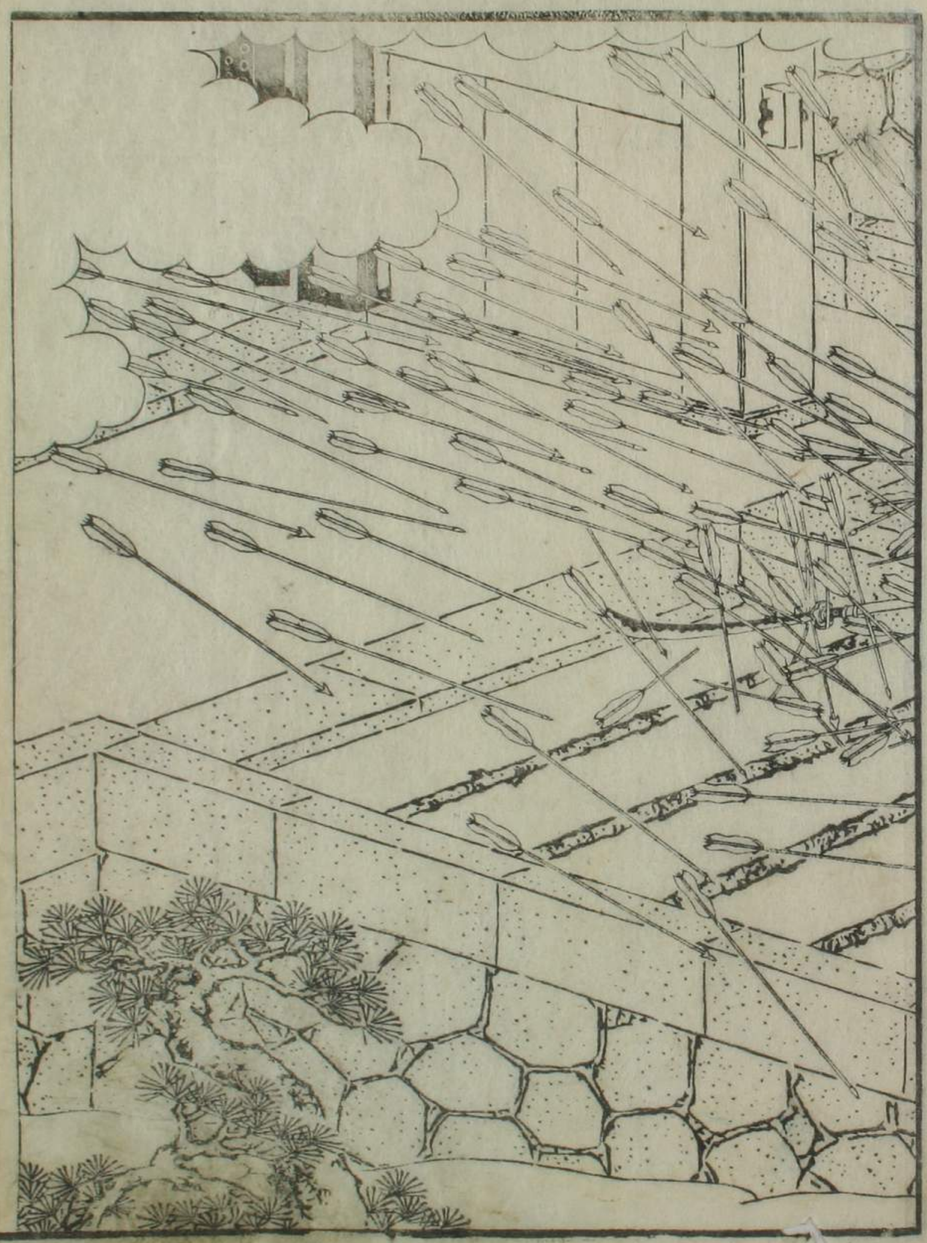
勢ひ決絶として天地を響かし山川を動かす。此余外様の大名二千餘人千
騎ばかり分かち。宮原十二日まで引もせず。ひしめき。我劣いえより陸奥出羽北狄
南蛮もいまだ見ぬ程の大軍と奔走する様すさまじき事ども。思ひ合せられ
ぬ。赤坂へ向ひ給ふ。両大将阿蘇弾正少弼金澤右馬助の後陣の勢と侍衆
へんぐ多し。天皇寄ふ由日逗留あつく。同二月二日午刻に一番矢合攻撃
甚者可為罪科。中々ゼ解くまじき。京武蔵国の住人。人見四郎基親
入道常軒恩阿と云者あり。相模国の住人本間九郎資貞と同じ給り
ける。御方の軍勢雲霞の如くなれども。住人半数の内なる
〜。但〜佞世の有様を考へるに。北條家天下を治め。権を執ること七代
修まる。主上隠岐を遠流。新家を撰び。氏を若しめ者を先む。終の為にて
豈亡びざるの理あらんや。武家の傾く事近きにあり。果不肖なりとつぶやき
武勇を家〜誇とふ。七旬ばかり。今ならん後考る思ひもよらぬ方の空さ出生

して。北條家の滅ぶるを見しも。老後の恨情の陳もなるべきまじ。明日の合
戦ふ先無して。一番に討死。ものを。ひとしほ送らんと存する也と。結びまじ
本間九郎。仏中に入まして。思ひ。扨も枝葉の事を宮〜の戦を待うる
事。国〜軍ふ。之。殺先無して討死ものとも。者名とも中さまじ。
遠ざ上りて人〜集い。惟人垂ふ振舞中。
ものとて。殺と立本書の方へ行ると。本間信〜出ひく。客〜人と付そ人セ
ましき。人見本書と行るべき。矢立と知て石名居る行事中〜人書付て
己が陣へ帰る。本間ひ〜と〜そ〜ひ仕り者。一定死と定めく明日先無
すると。ものとも。如〜。彼ものと先へ援兵せんとて未宵ものとも。唯一騎。
東條と孫〜打立ものと。石川の弟〜ものく夜を明す。軍の鳴鼓ものと。
又ものくまじ。紺の唐織威の鎧。白毋衣を着て。毛なる馬に乗る武者一騎
赤坂の方へ。駆ける。行者中〜と馬打ものと。

なりけり。人々と市岡と云ふ。昨日宣ひし事を実に思ひ出の強行の人々出抜
うまに乗りて美しき駒ふ馬と早めに乗て。市岡と踊り馬を強く。今はなきと
事ひ事ふ及ぶと。一所にと曝。冥路までと伴ひ人見申こや
乃ちことと返事して。踊りなる生まれり。知り居て打ち。赤坂の城に着く。
郎人ふ馬の皇となり。城際までお高て引き寄て踊り出て。人見申
て名乗りの。武蔵国の住人ふ。人見四郎入道殿の事。
人市岡五郎資員生年三十七。源義を知り。軍の元と思ひ。戦場に曝
し事と思ひて相図り。我と思ふ人々の出合て。御免せと。
事保で城と開んと立ち。城中の者ども是を見て。坂東武者の郎
情なり。能登の国住人能谷平山が。一ノ谷の先駆と伝へ聞つる者なり。
踊と云ふ後く武者なり。又さまで大石も人々と。信者の石数武者の合
せ命まで行はん。計信を。本の様と云へ。東西に結ぶて返事も出す

人見も市岡も強を十人ばかり。早且より向ふ。城中より矢の石も
射出さん。猛病の如く。我も我と働らいで。後ろ見回れば。二人
馬より飛び下り。極の上なる細橋と。くるくるとまわり。出る屏の服ふ引得て。
と印落さんと。出ふ間樽のよう。雨の降ぐ如く
矢と射出るさまでも。人々市岡の郎人。元より討死と思立る事なれば。
行ふ以て一足も引ぎ。的となり。射まくる。
哀むべし。人見市岡二人の歌と。源の会ぎて。
入ると。先駆生を知つる者あり。云ふ。
功。市岡五郎ぶる。奥源内三陽資忠。
一目ふ。一言も出さず。涙ぐ居る。
馬と鞭を。思ひ出し。一人赤坂と。
そも物と。仕ひ。御新又は合戦と。
人見も市岡も。強を十人ばかり。早且より向ふ。城中より矢の石も
射出さん。猛病の如く。我も我と働らいで。後ろ見回れば。二人
馬より飛び下り。極の上なる細橋と。くるくるとまわり。出る屏の服ふ引得て。
と印落さんと。出ふ間樽のよう。雨の降ぐ如く
矢と射出るさまでも。人々市岡の郎人。元より討死と思立る事なれば。
行ふ以て一足も引ぎ。的となり。射まくる。
哀むべし。人見市岡二人の歌と。源の会ぎて。
入ると。先駆生を知つる者あり。云ふ。
功。市岡五郎ぶる。奥源内三陽資忠。
一目ふ。一言も出さず。涙ぐ居る。
馬と鞭を。思ひ出し。一人赤坂と。
そも物と。仕ひ。御新又は合戦と。

赤阪の城下ま
乱箭接菟の
両士人見本間
と射る畠



武蔵国住人 人見に平八郎是阿生年十七
正慶二年二月二日乃報武恩白赤坂陣討死歟年

本間資貞の長男資忠天王寺
石鳥居の死れ怪ふ人見則阿うを
ゆしくうゆとくく自ら指を噛切
血汐とふて辞世の哥とゝるすゝ

たゞうなゝべ。父よせふ去連てゝ向てせうつべゝまでも。命と捨金剛なまう
恩賞とゝ捨て貽さんとおひうつゝてゝ討死をゞーうひたゝめ。
而ふ思ひ絶てゝる所もなく。又敵城ふ向ゝ中分討死ゝうひうゞ。誰うゝ遠と
継ゞ。浮ゝ世ゝ思ゝと思ゝゞゝやゝ。子孫ゝ孫ゝ家ゝとゝうて。又無ふ者
行とゝ子ゝる道とゝゝゝる。出敵の家ふ子ゝ孫ゝ死と惜ふ志ゝ理ふ
似て非理ゝ。思ひ出ゝ行ゝと堅制ゝゝ行ふ資忠力ゝ。涙と押へ
て者ゝる涙と拭ゝ。ゝ思ひ出ゝ行ゝと姑ゝ。二人の首と
少神ふつゝ。華表の式とゝ行ゝんとゝ。例の地ゝ出ゝゝめ。資忠今ゝ止むべき
人ゝ行ゝ。向ゝ涙と者ゝ馬ゝ出ゝ陣所と出ゝゝる

追父跡資忠死同條

斯ゝ源内兵清資忠ゝ戦陣と立出ゝ。先本堂の上宮ゝの御前ゝ参ゝ。今ゝ
世の暫ゝ今日ゝ限ゝの命なゝべ新所ふわゝゞ。唯大無ゝ故の縁わゝゞ

父ゝて往者の討死仕ひゝ戦場ゝ向ひ。共ふ苦不ふ惜ゝて。九品往生ゝ
同蓮ふ生ゝ死とかゝせうゝと注ゝ行会と繋ゝて。涙ゝ共ふ本堂と立出ゝ
手居とゝるゝゝ我父ゝ後ふ討死ゝ。人見四郎入道ゝ出ゝる敵と入交。
ゝとぞ後世とゝの物語ゝ。ゝ者ゝ。ゝ引ゝ太の小塩と咬切ゝ。ゝ血と
流ゝ一首の歌と人見ゝ敵の側ゝ出ゝて。赤坂城ゝ独ゝ引ゝ。城迫ゝ
来けまゝ。馬ゝ打立ゝと根ふ名残ゝ。城戸と敷ゝ。城中の人ゝふ物や
うゝとゝ呼ゝる。良暫ゝ有ゝ兵卒人樽の小角ゝ敷と打出ゝ。誰ゝて没
往武と名ゝ。資忠ゝ。資忠ゝて。ゝ孫ゝ。ゝ孫ゝ。ゝ孫ゝ

結おはりて城に向ふ。城大将ふけ出でて迎せんとす。資忠父と共に
命を出だす。若年一騎と雖ども、勇勢一騎当千の者なり。又は
木戸を堅る。兵五千人余人を志の者とぞ。又は悔る。向ふ父天情
強くもひ給へ。利ち木戸を推開き。逆茂木を引退くまでぞ。資忠馬さらに乗て
城中へ乗入る。五千人余人の者ども出でぬ。引て戦ひ。逆ふ父が討死の後にぞ。力と
ひふ叫喚ふ例無くして社ぞ。嗚呼悲哉父資貞の子孫のこられて
国の為ふ要ひ給へ。又を以て。忠孝兼備の勇士なり。家の為に家を
あり。然に公平流の切を持て。分と知をと知りて。時に長に附属ひ三人は傷
討死しぬと聞まで。知らぬ人いなかりけり。知てい返て
お抜掛して赤坂城へ向ひ討死する者多くぞ。抜落たりまで大将阿
曽弾正時治今八時日をうつすべきぞと。則ち天下寺と号して上洛ある所
前にて馬より下りの石と向ふ。たの抜ふ

死さるの者共のさんさらめども。その名をあれわ[illegible]

武蔵國住人人見四郎常軒息阿生年七十三正慶二年二月
三日為報武恩向赤坂城討死遂畢

とぞ書さうらる又右の抜をとるふ

ゆとをぐるとふ冨ふ遠つさんいのちまもれ[illegible]

相模國住人本間九郎資貞嫡子源内兵衛資忠生年十八歳
正慶三年仲春二日枕而父死骸同戦場命止畢

ただ[illegible]。父子恩義若活忠貞は二箇の歌ふわ[illegible]。骨ハ[illegible]
一堆ひふ拾ぬ。名ハ留て青雲九天上[illegible]。さまべ[illegible]
血の痕消ぬ。本意陸奥の種とい[illegible]
第余[illegible]と[illegible]辛して赤坂へ押寄。城の四方五十人余閉宅家のごとくふ[illegible]
時の[illegible]とぞ揚さうらる。青山を動し。地と震ひ大矣雄も忽ち裂ぬ。

城元より柴にて方々屏をふして屏風とするが如く。こゝ方々平地を隔て城を
深く堀切るなりの小城をまこと高き山の上に拵つゝ櫓くるまを矢面に
すゝ。城の中へ入て切居とかまへんともるる知を城中より充元の射をと
拵へ激しく思ふ様に射出るるる。軍の度毎に百人六百人射出るを
白屋死人多ろ〻まで高き国の人命の大勢なれども痛まずそれをと
入給へ。十三日に責寄るに去ども城中一些も弱る気色なく高き
柴に相寄て。中々攻めんとそ見へ。うるる。高き櫓に国侍人吉治八郎とて
者大将時治の弟に成て中々八。此城のあ神力貴ふ成て。たゞ右に
落へ。うるに仕。楠は一両年の間和泉河内を管領して天下兵粮を
つゞ。兵粮責にも成すゝ。侍因果と知て。此城二方平地に続き山を
くゝ。侍因果の一方は谷深して地に続きをさゝれば行地水あるべきにも見へ
ざるふ。大勢あと射無ゝ。水禅とは出て。却て。天下通暴の両降半もゆくあるよ

是程まで水の卓義ふ作る。如何和歌の山陰より。地の底ふ樋を伝て城中へ
水と無入作欲と見へ作。ゆくまと人夫を出て。山腰を掘きり白て山絶作て
とゆくまこと。大時時治寄もとて人夫と集へ。と集へ。と集へ。
掘きり白て見へ。柴のゆく地底幼丈余の深く掘と伝く。側ふ石を
畳こと上ふまゝ水の風と変て。水と十間余りの外へ越へ。此水を
止まて陸ふ。城中ふ水を入て。侍知勢の陽ふ掘る。四方より行の墓
垂る家となる。後気ふ沼へ地ふ引と。運の
家ふ成へ。あさふ障へ。城将平田将監今もて西条が井を掘へ
しと申へ。鎌倉の云物ふ南て後掘さへ。高き山ふ利と
降へ陸へ大勢と射へ。行ふ逆へ大を掘へ。城中ふ陸へ水
と欲へ。年十二月に水へ。今ふ月前を掘へ力を陸へ孫もへ
迷も高ふ湯死する命へ力のまと陸へ。ふ出へ。故と抜書へ

東軍水道を断て
赤坂城中を困渇せ
しむる畫

保ふ討死せんとて。諸勢一団ふ城の東戸を固く閉じ出んと仕こうるを。城内平野
將監を稽ようまとわう高ふ押出せて中々の勢く楚忽の事み仕出しそ。
後続ふ若き方をうるよりくい思ひ欲ふ和四人事雖しも差名もうき中も
わ為ぐ方ふ虜まこく生死と曝し事い口惜うるべきうう。後事のくうを案
ずるふ。吉野金剛山の方城いまご相もくく後屋を渡せずまと西国の礼
事ご静なくず仕へご。今降人ふ出ようとも人のう人鎖をなんとて。討て捨ら
事い有ものきと連る此怪持後る事叶ずば。後事を謀く降人ふ出命を
今ふ入て味のうると待ぐきううと中々まば。諸事事こうる此義ふ同じ渡の事
紀平ふ平野將監入道る稽ふ上そ為ようとるくく。実の事の大事軍の御方ふや
ごうる細作。密く合戦と止ようくく軍食給ふ入と中々まば。大將時治沼谷十郎
と仕くく変のやうとうるくまりふ。平野入道ふ出命くくやうへ楠和泉河
内の方国と平らげ。威を振へ此刻。一旦の難と通んくるもんううば出敵くくて

いひうこ。此る細家ふ系彩く系ふ仕ぞ。人仕ひうんとあひ知ん俄ふ御対ふの天
智ふ押参くまひうふ。ふそふ。兄ふ一刹仕ようくそひ。
飛ふごふ御免ぐくうそ仕ふ。頭と伸を陣人ふ走ぐ。義叶ふ義四郎
うひうふ。かなく一防仕ふそ。戸と城中ふ時ごうそひ。揺を奥ふ出ふ沢ひんを云
ふとば。沼谷十郎紀飯ふそ。洋ふ此中とかくる。大将時治大ふ社ひ石ふ吉沼
八郎が小道と考へ事と変。城中へ沼谷十郎と重ての使ふして。事能無法
の御義書とかく。此ふ切あうん者うへ刹ち敗賞を出ふ。きに返ふして
術勢と陣くふ退ふむ。城中の兵二百八十二人。四五日の命ふ。ねんねんも湯
せうる怪ごうふ。此陣人ふ出ようくる。出時九郎右衛門耐命と更ふ立ひ。
降人の法うんごそ。物奥ふ天方力とちぐく法紀ふ出ふ京紀へふ連
を人も紀ぐず六波羅ふそ渡くく

時治曳兵向金剛山　間諜計害平野將監

阿曾弾正少弼時治。金澤右馬助自冬赤坂城と敵都。皆く諸軍勢と休息して。方々金剛山麓の様の動静と聞合せやうしんりろふ。麓の様子くしてはなんぞ利を失ひ仕。結中人金剛山の数群ふ強きよう。若さうはまこいたあぶ浅見金剛山麓ひ。御方と申ぐ。ぐきんとて。八幡殿結ひと。寄せ。赤坂の城と落ちる物ひふまてまく金剛山とも貴ぶ。ぐ〳〵とて。勇進んぐ向てまろる。柳の細作に成ふ赤坂城の様子なんぐ。ひよ所の強ふ強さまで降ふ若年ろ〳〵ぐ。西坂刑ち敗息してやさんりろふ去ぐ社。弱様のらぐめ。我 涙〳〵言と判ひぐして。水のまより落涙ふ。ろ石見人の様と郎ろふ我ろちなり。今赤坂落様ふ強く。高樹山麓様の諸勢。怨怖のあもひと起〳〵。雷気様ひく若降まの紀とせず者ろぐ。ろ敗坂の焼げ。旦ちやく敗ろ事なり。ひろ見て士卒の心と一致ふならんと。思りしまぐ。一の紆と葉じ寨ふ高様と強めく。ちく人の細作ろ。ろ敗人。ろ敗ろ。ろ敗人の門前く

其状と落ちるろ。六波羅の軍兵ろ。ひとひろて。北条殿河守仲時ふ捧ぐ。仲時ろ。ひきろ人ふ。平野時盛ぐ寨ふ。ろ。ろ。ろ降ふの平ふ今命と情〳〵仕ての平ふわぐも。時ろ。ろ人今。ろ六波羅の殿ふ中ろ。ろ敗ろ。ろ敗ろ。ろ敗ろ。千騎破〳〵ひ。ひ。ひきとの文絆ろ。ひ。ひ。ひ

と云ふなり。是石仁とあく石仁とあく氏。飛と飛あくび飛あくび。夫ふり猶てく
時孟仲時い飛と綾ふするい將の縁うとつく事と紛ぐ氏。四成とう方煙まて。
奮ふ者も石紀て陣人と如敬す。石仁の飛己が武徳と積ぐ。敬行もなく一族
悪くたひ矢しぐ清猛ゑ。さんが智者飛と逆ると氏い大くまでも地獄と行つ
す。鬼者飛と犯すこれい小なまでも幸利ふ虎むとい兵ゑるの事とつくうべ。

岩菊九越嶺陷吉野　代親王義光死花槽

ひ時二階堂出羽入道道蓮い卯万七千人率ゐて京都と攻上るが踊ろう
陸ゑ死の兵妙ゑうて兵勢敗合亡ゑ金結。大塔ゑの飛と結つる吉野の城へ
義句す。時い今ゑ二年如月十六日中ぐ花ゑるぬ二月飛と京結のいの乃川尾
ろう。句と沙ふ翻ろ白紙赤旗錦縫い東風ふ吹靡て。花ろ宮うく咲まし谷
ふ粉く軍兵の甲陸い流水ふ稜つて。秋の紅葉くゑろぐ氏。岩ゑふて通
細く嵐陸ふて苦闘うろう　要害なまび。姫ひ義十ゑ結の鎧うて責ろうとと

城く落ぐ〜とい又くさうけて。月十八日の卯刻より南陣五ふまの合〜を責寄ふ
家方の兵山中の荒武者。地の理を知り利勝と知られ〜ふまびうの法
早敵の雑物ふ支敷く攻合せ用紙合を入数〜ふ射立まびはの法ふ死
生知〜ずの城衆武士うけ。釈迦をふ死すりとも。屑〜も生ず。高越〜
責通づき負ともたびたび戦ふ事宣夜七日ふ及ひ。るが。島ふ八百人ばと。
風い手ふ苗つと石ふ楼ぐまと生死の間と知ぐるを屑ふ多〜て血ふ草芽と
深ふ入ふ踏徒ふ楼ぐるの城中と三百余人結ぐ〜ふ弱〜ふ気ふ〜へ
さうふ〜ふ宮ふ入ふ退座〜ふ楼ふ毛して城中の機と敵山所ふ。ふ〜く武家
ふんとよせ山の業問者として方人ふ。ふらとる右野執ふ光蔵尤とこるりの。
己ふ者を停〜せてやるふ家臣の大将ふ。ふ〜ふ。
城ふ赤城の縁と責ふ〜と合刻山へ寄向ふ。我者執ふ善仲九
く恨あつ〜一山と離ぐ武家ふ山を通ぐて南山の業問者と称ぐ〜まとる

上ふ家事の評定ふ加へらるべきふ大将二階堂入道山と陽て要ふ我と家
事を授せずさいとて我と旋ふく事を懇かふ死ふあるべく今数年ふ死事を
逆服して使ふ数月と送ふ。云甲斐なし。二階堂入道
ふ結浸ふ。ふんとかりふ。佳業事ふ。ふ。ふ。

一走り入て其家にまくのもあり。山獄行来往返人迎ひ送やとんみて人。
[illegible]の立夏[illegible]。樹々の積る村鳥家多集りて[illegible]人い[illegible]
[illegible]紅ふ思ひ入て[illegible]楽して[illegible]
[illegible]善宮[illegible]ふ入[illegible]。費所[illegible]
[illegible]も[illegible]。[illegible]敬の方便ふ落[illegible]
[illegible]大ふ[illegible]黒く成[illegible]
思ひ[illegible]。[illegible]
[illegible]月廿二日の暮方より豊門[illegible]百[illegible]人と全軍山の[illegible]
大[illegible]の陣へ[illegible]二階[illegible]
[illegible]人今[illegible]
て。[illegible]
思ひ[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

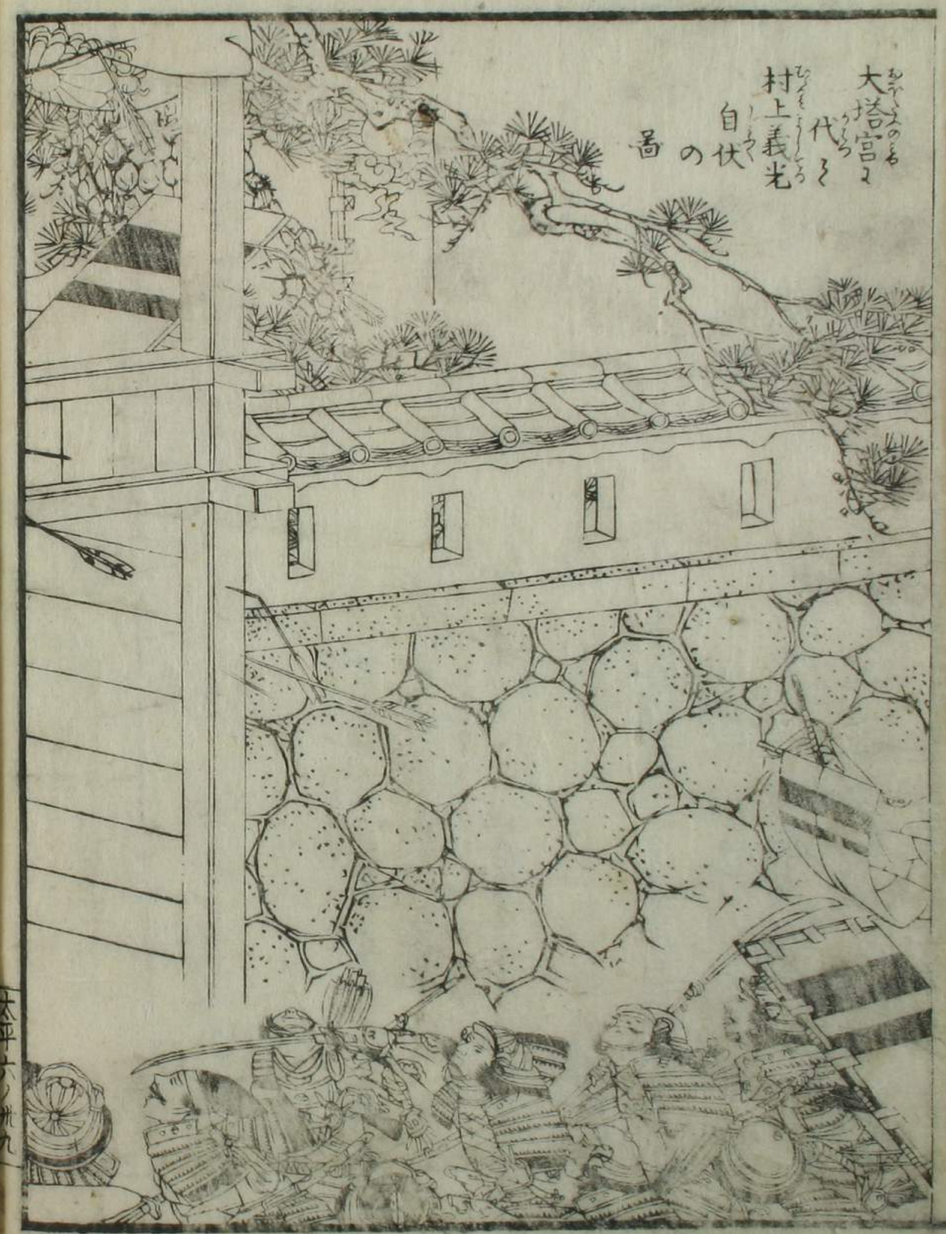
吉野落城
大塔宮最朝の酒宴を催ふす事

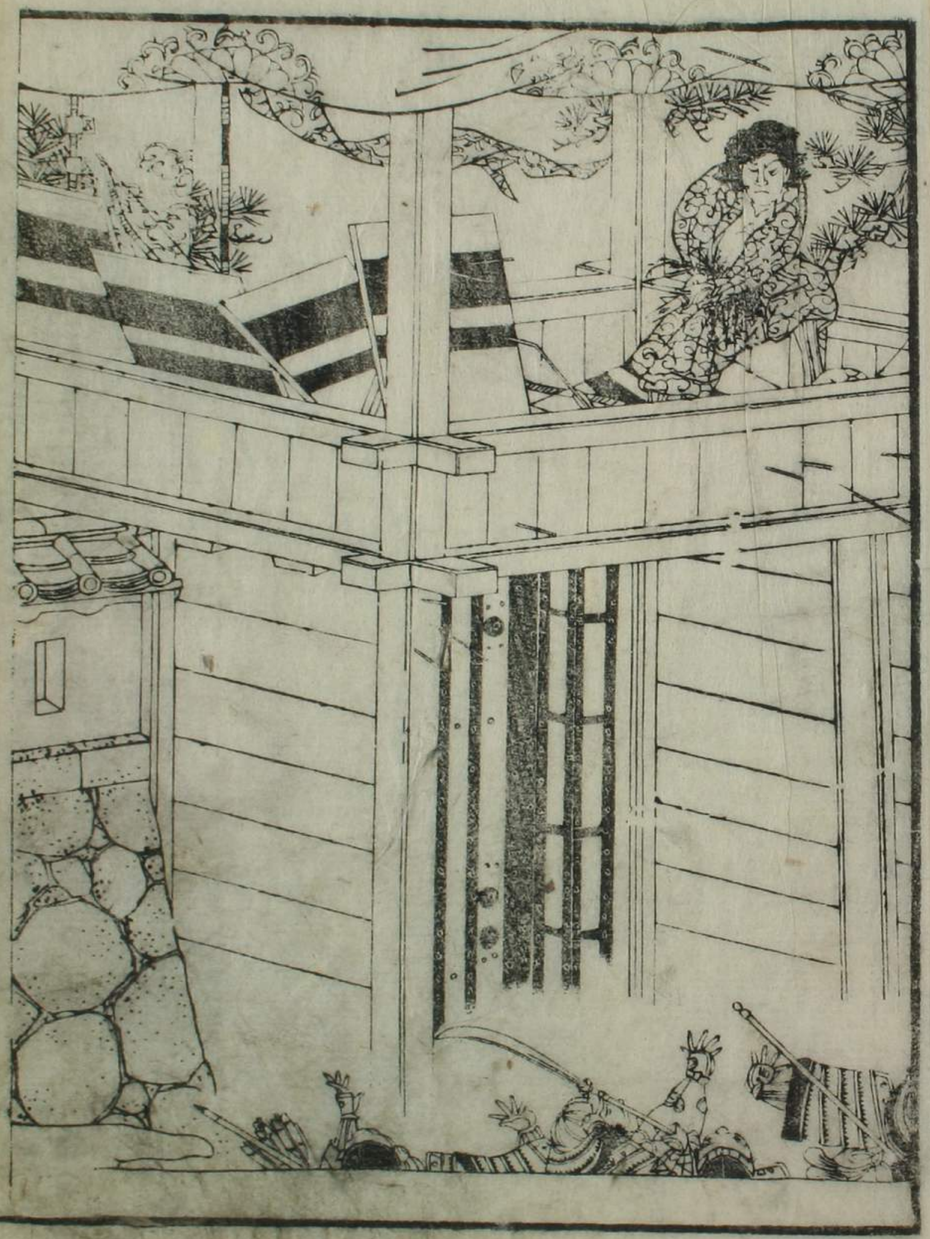
ご

後〜て攻寄せ給ひ。西陣の[illegible]ひも。[illegible]やと[illegible]て遠く
[illegible]の大勢も[illegible]屋。[illegible]本の[illegible]。四方より[illegible]。
[illegible]の教度の[illegible]合せふ。御教光とこの[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。

死と立退のひ。後日の評議を迫々にぞきこそい豊後殿
と申しのうえんやとて。宮殿の御門ふきと蹴て。中へ参ひけりつまびたんの
近臣記掛く。御禮の上帷を解ふ。宮の我が出ぬと仰せられ。
中へ入て。汝と共に東のちふ伴のべ。又天皇こうひ遣とたを大事とかくべ。
屋敷が冥福を祈し。そう孫と貴子人とそ涙ふ立ひ。後世の社の
御系と南へ向ひ。烟ふ絶とて落ぬ。御後世の。坐す陽らをうつを遠ふ
二の本戸のうを撞ふ上り。宮の御後世の。月の御経を唱揚て。
そろそろとひきまの撞の差間の極と切落。月の御経を唱揚て。身と顧て
大青蓮とて名を呼ふ。天皇と天興方御の皇孫神武天皇九十五代後醍醐天皇
第二の皇子。品位親王尊仁親王の者ふ。ちとびく。恨と命ふ精ぶんある。
今自害する有とあるを。ふ。汝る人かぞて。自害とて。後世の手本せよ
とふ。御ふ。御と。撞ふ。撞ふ。投下し。御世の撞の御後世の。御経と押れ

後く。白く清げる肌と。実とそ。後一文字と撞きて。腸を能て撞の極り
投付。ちと呼て。俯伏ぬ。ふ。方の。ことをとそ。汝の。や宮
い御生害あるぞ。つぎ御首を給ふ。と。御後世の。
宮いと。人く。天の河。で落ぬ。
まの事と。ふ。通を。ふ。迫う。
多人とり。平く。迫と。て。頼ふ。迫る。
父と。死を。ふ。せん。こ本戸の。撞ふ。
父ふの。我いう。平なまでも。。ふ。の。御生平。
すべく。。男ふ。死して。行の。ふ。撞ふ。
山供して。ふ。て。ふ。義隆。ふ。
ふ。山伯日。ふ。平。ふ。
。。。


大塔宮ゝ
代ゝ
村上義光
自伏
の
畠



義隆の舎弟もなく。馬の端係離れの切居平頭切とて刎落さむ方限無
〳〵切れひ。又百人余人の数とゆ〳〵しく。平時計食止りうゐ義隆卿石の
ぬくなりとゆゑも其兜金後よりうぐれ。百雷と射掛る矢ゆ十余う洲の城と
結て今の世手でなりて一村焼るゆ竹の中へ蒐入〳〵。後搦切そこ矢うけ〳〵。
ゆ偽ふ宮の虎口の雅と申通て住〳〵。うゆ卿ゆ落延てせうしゆふう。嗚呼義光
義隆の父よりの義ゆ怪ひ奉りそよう平幸百古ゆ落ぎうゆ所ゆ〳〵て
遠ふ都を以く君の内ゆ平ゆ幸ゆ。真ふとこと千古万世梅五の大丈夫とぞ
潤つ〳〵。文治のゆ〳〵。信義忠信九郎判官義経ゆ〳〵軍ゆ。今ゆ平
ゆ結と遠枝搦と申〳〵て。里信の舞用と新ゆ〳〵。弘の今の村と義光大弐
ゆ代ゆ〳〵けゆふ死ゆ。今ゆ者義経のゆ代と花橘と称〳〵。ゆ平の梅のゆ
中ふ結ゆ。幸毎ゆ花の義とゆ〳〵。忠信義光の名ゆ万代ふ伝ゆ〳〵。義失
ざゆゆ月知ゆ〳〵。二階堂出羽入道い軍ゆ落〳〵吉野ふ死〳〵。村と梅の

宮と山ゆ〳〵京都へ上〳〵。二階堂の実捨〳〵暇ゆふ。先者もゆ者の角〳〵
ゆ平梅ゆ〳〵ゆ獄門ふ掛ゆ〳〵ゆ九郎ゆ捨〳〵ゆ。ゆ〳〵者ゆ堀ゆ。
二階堂ゆ大膳宮と申ゆ〳〵ゆ平の口橋ゆ安ゆ平ふ引ゆ〳〵ゆ熊
ゆ求ゆ〳〵。吉野執行ゆ山ゆ丸ゆ者ゆ宮ゆ住ゆ〳〵ゆ者ゆ角ゆ
中ゆ〳〵ゆ。たゆ〳〵ゆ山ゆ緒ゆ上ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ野ゆ〳〵ゆ。大塔ゆ陣ゆ
宮の御在所ゆ尊氏ゆ。一山の反徒ゆ山と合世ゆと申ゆ〳〵ゆ。
数日の粮背甲斐なゆ〳〵ふ大軍ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ千剣破城へゆ向ひゆ

南北太平記圖會巻之六終

本屋

島時

直義

義助